

## 言葉を育む「おはなし」の現状と課題

小山祥子

### 1. はじめに

近年、若者の言語力低下が、さまざまな調査によって明らかにされています。OECDによる学習到達度調査(PISA)<sup>注1</sup>では、日本の読解力の弱さが指摘され、国内の国語世論調査<sup>注2</sup>では、人とのコミュニケーションにおいて「言葉に表して伝える」という人は減少し、「互いに察し合っつて心を通わせる」人が増加しているという結果でした。また、小中高

生の問題行動調査<sup>注3</sup>では、暴力件数は年々増加し、特に生徒間の暴力が最も多く、言葉による問題解決が困難になっている現状がうかがえます。一方で、パソコンや携帯電話がコミュニケーションツールとして日常的に使用され、思いを伝える表現方法が多様化すると同時に、機器使用の低年齢化によって、言葉の成熟機会が妨げられる危険性も生じています。人間が社会的動物として他者とかかわって生きていく上で必要な言葉の獲得は、乳幼児期に重要であ

ることは言うまでもありません。就学前の保育所や幼稚園では、子どもの発達の一側面である「言葉」の領域から言葉を豊かに育むことを生活の中で援助しています。現代の言語力低下の問題を考えると、保育においても領域「言葉」の内容をいっそう充実させることが重要になってきているといえます。

保育所保育指針や幼稚園教育要領では、領域「言葉」の意義・ねらい・内容を明示していますが、実際の保育現場では各園、各クラス、各保育者によって扱われる言葉の内容はさまざまです。保育者による意図的な言葉の保育内容は、どれくらい実践されているのでしょうか。特に、絵本・紙芝居の読み聞かせや、昔話・民話などの素話は、乳幼児に「おはなし」の世界を通して想像力や表現力を養い、言葉の獲得に有効な教材・手法としてよく使われています。

そこで本研究では、これら「おはなし」の保育現

場における実情を知り、その実践傾向を考察することで、昨今の「おはなし」の現状と課題の一端を明らかにしてみたいと思います。

## 2. 研究方法

本学（駒沢女子短期大学）保育科二年生の幼稚園教育実習における三週間の日誌の中から、本研究の目的に沿う内容（期間同じクラスの配属、時系列による保育記録、「おはなし」のタイトルの記載）の日誌を抽出し、それぞれ異なる園から計八クラス（年長四クラス、年中四クラス）の保育記録を分析しました。期間は二〇〇九年六月八日から六月二十六日の十五日間です。

## 3. 結果と考察

### (1) 「おはなし」の実践回数

八クラス十五日間の「おはなし」の実践総数は89

回(話)で、一クラス一日当たり、0・7回(話)でした。一日1回にも満たず、クラスによって「おはなし」を実施しない日があることとなります。

## (2)「おはなし」の実践場面

「降園前」が最多で八クラスの合計は71回、全体の約80%を占めていました。

次に多かったのは「課題活動前」で10回(約11%)、続いて「昼食後」が5回(約6%)、

「昼食前」が3回(約3%)でした。

## (3)「おはなし」の種類

絵本によるものが50話(約56%)、紙芝居によるものが37話(約42%)、

素話が2話(約2%)でした。

## (4)「おはなし」のテーマ

対象となる82作品について分類したところ、

「創作話」は40作品(約49%)、

「自然・生物に関する話」は11作品(約13%)、

「生活やしつけに関する話」は8作品(約10%)、

「キャラクターが主人公の話」は7作品(約9%)、

「年中行事に関する話」は7作品(約9%)、

「月刊絵本」は3作品(約4%)、

「科学に関する話」は3作品(約4%)、

「世界の童話」は2作品(約2%)、

「日本の昔話」は1作品(1%)でした。

これらの結果は、保育現場の一端ではありますが、クラスによって、すなわち保育者によって「おはなし」の実践回数や種類、テーマに偏りがあることがわかりました。特に、毎日必ず「おはなし」を実施していたクラスは、八クラス中二クラスだけで、一日の中で「おはなし」の時間が1回もないクラスがあることは残念な結果でした。

「おはなし」が実践できなかった日の記録を再分析

すると、午前中の保育プログラムが過密であることがわかりました。たとえば、園の行事的な取り組みがあったり、外部講師による英会話や体操などの時間が組み込まれていたり、担任によるその日の課題活動を加えると時間的に厳しいということが推測できます。

しかしながら、もし保育者が「おはなし」の時間を重視するのであれば、短時間でも組み込むことは可能ではないでしょうか。つまり、「おはなし」が実施できないのは、保育者自身の「おはなし」に対する姿勢が影響しているとも思われます。あるいは、「おはなし」を領域「言葉」の観点から計画的に盛り込むべき日案の作成方法に課題があるのか、または園全体の保育形態や方針に課題があるのか、さまざまな理由が考えられます。実際に保育者側の「おはなし」に対する考え方や、実践できない理由を今後明らかにする必要があるようです。

「おはなし」の保育場面は、「降園前」の実施がほとんどでした。これは、一日の保育の終わりを落着いて静かに迎える保育者側の意図的な実践と受け止められます。倉橋惣三は、『幼稚園真諦』の「おかえり」中で次のように述べています。

「このときだけは、先生の考えを強く表わしていくべき……」

「幼稚園にもシンミリしたときがほしいと思います  
が、お帰りのときは是非そうありたいのです」<sup>注4</sup>

このことが、現在も保育現場で自然に実践されているといえましょう。一日、園内で十分にエネルギーを使い果たした子どもたちにとって、お帰り前に触れることができる「おはなし」の世界や保育者の優しい語り声は、安心と信頼を抱く貴重なひとときとなっていることでしょう。

「おはなし」の種類については、絵本と紙芝居によるものが合わせて98%とほとんどを占めています。

た。視覚教材を使用しての「おはなし」に、圧倒的に偏っていることがわかります。素話はわずか2%にすぎません。保育現場における「おはなし」は、いまや絵本や紙芝居など視覚教材による「おはなし」だけに頼っていることがうかがえます。「おはなし」のテーマについても、創作話が主流となり、日本昔話はわずか一話でした。

これらのことから、日本の語りの文化を象徴する「素話」や「昔話」が保育現場から消えつつあることが危惧されます。

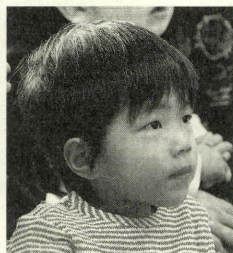
先行研究の中から、保育学生の幼少期の「素話」の経験値を参照すると、「非常に多い」と「多い」は、合わせて3%、「時々」が10%、「少ない」が28%、「まったくない」が53%となっていました。保育者を目指す学生自身の素話体験が大変乏しくなっていることがわかります。素話をしてもらった経験がなければ、そのおもしろさや意義は見いだしにくく、

自ら保育者として実践する姿勢は培われにくいと思われれます。すなわち、今後何らかの手を打たなければ、素話の復活は難しいといえるでしょう。

#### 4. おわりに

筆者は、言葉を豊かに育む保育手法の一つとして保育者による素話は大変有効なものと考えています。絵本や紙芝居のように視覚によって限定される世界よりはるかに、想像力や集中力が高まり、言葉獲得の前提に必要な「聴く力」がまず育つからです。それゆえ本研究の結果から、現保育者は語りの文化の担い手であることを再認識し、領域「言葉」の内容を日々充実させる一方で、保育者養成段階においては、学生に素話の意義や効果を伝え、実践的に身につけていくことが急務であると思われる。

素話は、言葉のみならず保育者と子ども、また子ども同士を見えない糸でつなぐ人間関係構築にも有



▲おはなしの世界と語り手をつなぐ熱いまなざし

効的です。耳から聴くおはなしの世界を懸命にイメージしている子どもたちのまなざしは保育者へ一直線に注がれ、信頼の絆となることでしよう。保育者が語る声は、その場で話の世界を共有する子どもたちに一体感をもたらす不思議な力を与えます。言葉の育ちを促す「おはなし」のさまざまな効果に着目していくことは、将来的に言語力低下を予防することになるのではないのでしょうか。祖父母と暮らす子どもが少ない現代、共働きなどによってゆつくりと語り合う時間を取りにくい家庭環境において、いまや保育者は、日本の「おはなし」文化を語り継ぐ

貴重な役割を担っているということを改めて意識しておきたいと思います。

(駒沢女子短期大学

保育科准教授)

注

- 1 経済協力開発機構(OECD)、国際学習到達度調査(PISA)では、日本の十五歳の「読解力」は、第一回(二〇〇〇年) 8位、第二回(二〇〇三年) 14位、第三回(二〇〇六年) 15位と経年ごとに順位を下げていく。
- 2 文化庁 二〇〇八年度国語世論調査
- 3 文部科学省 二〇〇八年度小中高生問題行動調査
- 4 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館 二〇〇八年 P. 130～131
- 5 長根利紀代「素話・紙芝居におけるイメージと表現」『名古屋柳城短期大学紀要第二九号』二〇〇七年

\*本稿は、拙著「保育における語りの文化の現状と課題——おはなしの実践傾向から——」日本保育学会第六十三回大会発表論旨集二〇一〇、および、拙著「乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題(1)」『駒沢女子短期大学研究紀要第四三号』二〇一〇をもとに書き改めたものです。